

名もなき人々の歴史

著者の富田満江氏の「本書を出版して」の文章を紹介します。

郷土史は民衆史である。

江戸時代の人々の8割は、林業や漁業を主として営む人々を含め、大半は農業を営む百姓といわれる人々であった。武士も中世までさかのぼれば、在地百姓や地侍などの士豪で、農業を営んでいた。ほとんどの人のルーツは農民なのである。江戸時代の農民には名字（苗字）がなかったといわれていたが、実は公式に名乗れなかったのである。その理由は土地の所有権と関連があると考えられる。

本書の内容は、第一章で江戸時代の村、歴史上初めて出現した「村請制」の村の行政組織、編成方法、運営方法、支配者の指導監督などについて述べた。第二章では江戸中期に商業経済の発達によって社会構造が変化し、農業を営む上で重要な河川や治水条件の変化も加わって、村々が荒廃した様子を、そして治水事業をはじめさまざまな対策が取られ、一時小康状態となったことや、村人にも生活のゆとりが生まれ、祭りなどを楽しむことができたことなどを述べた。第三章では江戸後期、外圧が契機となって幕藩体制が崩れ、村請制も崩れていく様子を述べた。

256年余り続いた江戸時代の、村の変容を内部から書き著そうとしたものである。村々にはまだ多くの文書と、名もなき人々の歴史が遺されている。

